# 令和６年度小平市立小平第五小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

## １　調査目的・対象

**児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。**

## ２　調査内容

**（１）教科に関する調査**

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

**（２）生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査**

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

## ３　各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

全ての項目において全国・東京都平均を上回った。その中で、材料と関係付けたりして話すことの正答率が 69.2 ポイント、資料を活用しながら表現を工夫して話すことの正答率が 62.4 ポイントと「話すこと・聞くこと」のポイントが低かった。

課題

たくさんある情報の中から、必要なものとそうでないものを整理する力や自分が伝えたい事柄が聞き手に分かりやすく伝わるために効果的な資料を選び、表現の工夫をしながら話す力に課題が見られる結果となった。

学校で取り組む具体的な改善策

・代表の言葉など、人前で話す経験を意図的・計画的に設定するとともに、相手の表情や目を見て話ができるよう、原稿を見ずに自分の言葉でスピーチすることを習慣付ける。
・場に応じた声の大きさや、相手に応じた話し方が身に付くよう、国語科を基盤としながら全ての教育活動で全学年が系統性を意識しながら指導を行う。また、資料を使って話す場面では、伝えたい事柄と資料が対応しているかについて考える場面を設定する。

【算数】

状況の分析

平均正答率は全体で 73%と、全国および都平均を上回った。領域別にみると「数と計算」が最も高く、75.9%だった。反対に一番低い結果となった領域は、「変化と関係」で 64.4%。中でも「速さ」の単元の正答率が低く、44.4%だった。

課題

「速さ」の学習では数直線を用いて問題を解決することが大切である。問題場面を数直線上に表し、単位量当たりの大きさを求める考え方を適用して問題を解決する能力に課題が見られる結果となった。

学校で取り組む具体的な改善策

・授業者用デジタル教科書及び児童用デジタル教科書を効果的に活用し、視覚的な支援を充実させる。
・数の構成の学習で扱われる「数の線」、加法・減法で扱われる「テープ図」「線分図」、乗法・除法で扱われる「比例数直線」（2 本の数直線）の単元を通して、事象を線分図で表す作業を繰り返し習得させ、問題解決のツールとして活用できるようにさせる。

【質問紙】

| 状況の分析 | 課題 |
| --- | --- |
| 「自分と違う意見について考えるのは楽しい」「友達関係に満足している」「先生はよいところを認めてくれている」児童の割合はとても高い。「困りごとや不安がある時に学校にいる大人に相談できる」児童は東京都より 12 ポイント以上低く全体の約 55 ポイント程度である。「新聞を読んでいる」児童は 26 ポイントとかなり少ない。 | 教員は児童のよいところを認めて励ましているが、児童が困ったときの相談相手にあまりなっていないことが分かった。教師は児童との信頼関係を丁寧に築き、学校で困った時にすぐに相談できるようにしていく。また、学校に行くことが楽しいと感じる児童がさらに増えていくように学年経営・学級経営を見直す。 |

学校で取り組む具体的な改善策

・道徳の学習の中で、自己を見つめる時間を十分に取り、多様な考え方や感じ方が引き出せるように発問や場面を工夫する。
・チェレンジ精神や自己肯定感を高めていくために、行事や縦割り活動等の特別活動の時間を計画的に実施し、リーダとしての自己の振り返りを丁寧に行っていく。
・1 学期末の Hyper-QU 結果を丁寧に分析し、学級の中の個々の児童の傾向をつかみ、副担任を含めた学年経営・学級経営に活かす。
・家庭の中で新聞を読む機会がない児童は年々増えている。図書委員会を中心に図書室の新聞コーナーを充実させる工夫の仕方を考える。